

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

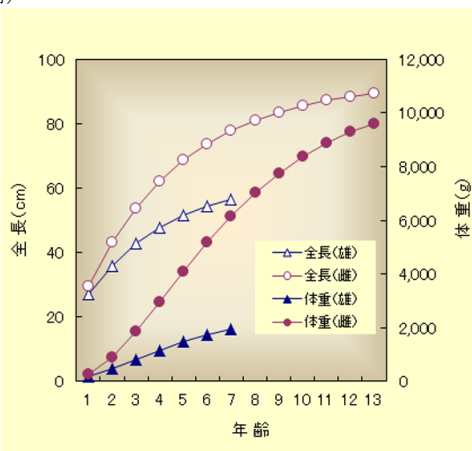
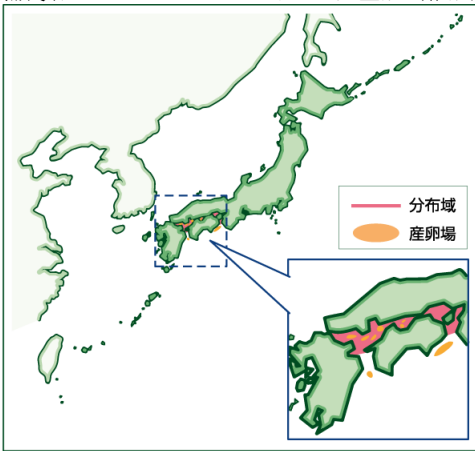
系群名 瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 15歳程度
成熟開始年齢： 1歳（4%）、2歳（雄52%、雌75%）、3歳（雄91%、雌82%）、4歳（100%）
産卵期・産卵場： 東部海域は2～5月、中西部海域は3～6月
索餌期・索餌場： 未成魚期までは瀬戸内海全域、成魚は瀬戸内海に留まるものと、紀伊水道、豊後水道に移出するものがある
食性： アミ類、仔魚等（着底後の稚魚）、成長に伴い魚食、甲殻類やイカ類も捕食
捕食者： マゴチなどの大型魚（稚魚期）

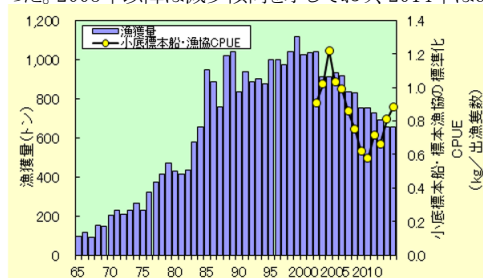


漁業の特徴

主に小型底びき網(小底)、刺網、定置網、釣りによって漁獲される。2014年の漁法別の漁獲割合は、小型底59%、刺網21%、定置網13%、釣り7%であった。秋には未成魚、冬～春には成魚を中心に漁獲される。本種は栽培対象種である。2013年には279万尾の人工種苗が放流され、放流魚の混入率は10%、添加効率(放流魚の漁獲加入までの生残率)は0.04と推定された。近年の漁獲努力量は減少している。

漁獲の動向

漁獲量は1970年代前半までは200トン前後だったが、1970年代後半から増加し、1999年には最高値の1,118トンとなった。2003年以降は減少傾向を示しており、2014年は654トン(概数値)であった。

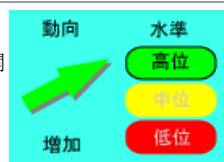


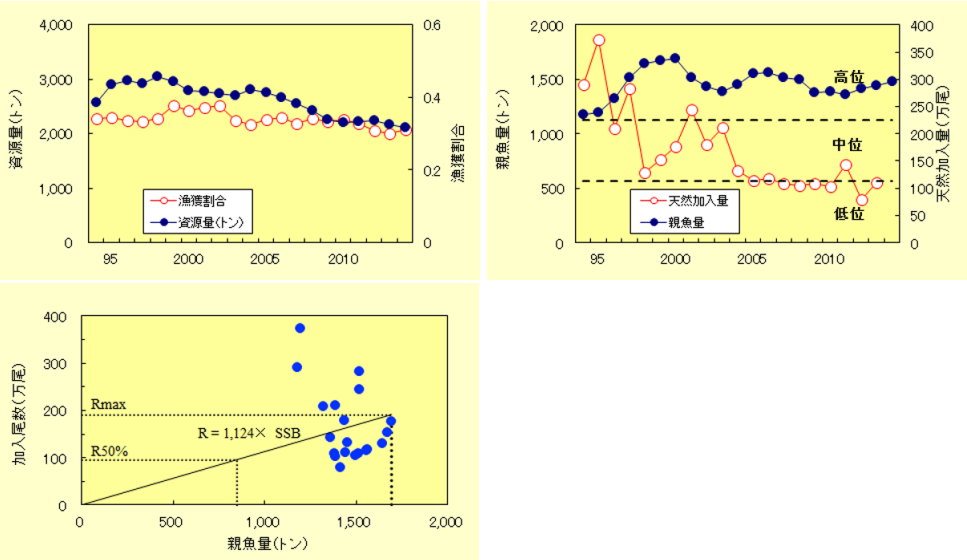
資源評価法

1994～2014年の年齢別漁獲尾数を基に、小底標本船および標本漁港のCPUEを用いてチューニングをしたコホート解析による資源量推定を行った。

資源状態

資源量は1998年に最高の3,042トンとなった後に徐々に減少し、2014年は2,107トンと推定された。親魚量は、1994年の1,178トンから増加して2000年に最大の1,694トンとなり、その後は1,500トン前後で推移している。2014年は1,479トンであった。Blimitは、再生産関係において最大加入量の50%が得られる親魚量847トンと設定した。2014年の親魚量はBlimitを上回っている。1994～2014年の親魚量を0～最大値の間で3等分して下から低位、中位、高位とし、資源水準は高位と判断した。過去5年間(2010～2014年)の親魚量の推移から、動向は増加と判断した。





管理方策

2014年の親魚量はBlimitを上回っていることから、現在の資源水準を維持することを管理目標とし、ABC算定規則1－1)－(1)に基づき、2016年ABCを算定した。資源水準を維持する漁獲係数Fsus(0.60)は、2014年の漁獲係数Fcurrent(0.56)より大きい。近年(2011～2013年)の再生産成功率の不安定性から漁獲圧の増大は望ましくないと判断し、管理基準はFcurrentとした。

管理基準	Limit/Target	F値	漁獲割合(%)	2016年ABC(トン)
Fcurrent	Limit	0.56	28	546
	Target	0.45	23	455

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量
- Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の増大または維持が期待される漁獲量
- ABC算定には規則1-1)-(1)を用いた
- Ftarget = α Flimitとし、係数αには標準値0.8を用いた
- Fcurrentは2014年の2歳における漁獲係数
- 漁獲割合は2016年漁獲量／資源量

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位、動向は増加
- 資源量は1999年以降減少傾向を示しており、2014年は2,107トン
- 2014年の親魚量は1,479トンで、Blimitを上回っている

管理方策のまとめ

- 現在の資源水準を維持することを管理目標とし、2016年ABCを算定した
- 放流尾数を減少させたとしても、同時に漁獲圧を減少させることができれば、現状の資源量を維持できると考えられる
- 主要漁業である小底の漁獲努力量が減少し続けていることから、近年の放流尾数の減少が資源量に与える影響は小さい

執筆者: 阪地英男・山本圭介

資源評価は毎年更新されます。